

『世の終わり・1』

'21/08/22

聖書箇所: マルコの福音書 13 章 1-13 節 (新約 p.93-)

今から20年以上前、「ノストラダムスの大予言」などという本が流行して、「1999年、第7の月に恐怖の大王が来るだろう…⇒1999年に、私たちが住んでいる、この地球上に何か大変なことが起こる…人類が滅亡するかも知れない…」というようなことが取り沙汰されて、かなりの反響を呼んだことがありました…。

そのように、いつの時代であっても、「終末思想」と言うか、世の人たちは、「この世界が今後どうなっていくのか？」ということに関して、関心があるようです。でも、確かに、そういったような「世の終わり」に関しては、神様のお言葉である聖書や、また、イエス様も、はっきりと教えてくださっているわけで、私たちは、この聖書の教えてくれている範囲内で正しく知っておくべきです。

命題: イエス様が教えてくださった、患難時代の前半に起こること?

そこで、今日と来週、私たちはマルコ 13 章のみことばから、あのイエス様が弟子たちに対して教えてくださった「世の終わり」について…、特に今日のところは、「患難時代の前半に起こること」について学んでいきます。そうすることで、願わくは、このメッセージを聞いてくださった皆さんが、今後、どのような方向に世の中が進んでいっても、あわてることなく…、聖書のみことばに留まって、私たちの主なる神様の栄光を現わしていけることを願います。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、今日のみことばであるマルコ 13 章前半をお開きください。

プロローグ・イエス様からの警告! (1-4 節)

どうぞ、まずは、今日のみことばの内、「導入部分」とも言い得る 1-4 節の部分に注目していきましょう。そこには、この章全体に関わるようなイエス様からの「警告」でもって、今回のみことばが始まっています。今日のみことばの内、1-4 節には、このように記されています。

- 1 イエスが、宮から出て行かれるとき、弟子のひとりがイエスに言った。「先生。これはまあ、何とみごとな石でしょう。何とすばらしい建物でしょう。」
- 2 すると、イエスは彼に言われた。「この大きな建物を見ているのですか。石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。」
- 3 イエスがオリブ山で宮に向かってすわっておられると、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレが、ひそかにイエスに質問した。
- 4 「お話しください。いつ、そういうことが起こるのでしょうか。また、それがみな実現するようなときには、どんな前兆があるのでしょうか。」

●イスラエルが受けなければならなかった、試練の理由!

どうぞ、今読んだ 1 節に注目してみてください。…そこには、『イエスが、宮から出て行かれるとき…』とありますので、この時も、イエス様の一行は、エルサレムを出て、いつものベタニヤへ行こうとしておられたようです。その時、弟子の一人が、こんなことをイエス様に言います、「先生、これはまあ、何と見事な石でしょう! 何と素晴らしい建物でしょう!」って…。

…と言いますのも、この時に弟子たちが見たという神殿は、歴史的にも、かなり立派で、素晴らしい神殿であったからです。彼ら弟子たちが、この時に見た神殿は、歴史的には「ヘロデの神殿」と呼ばれるもので、ヨハネ 2 章のみことばには、「建てるのに、“46年”もかかった…」というような記述があります。…

つまりは、それほど、その神殿は立派だったのです。恐らく、弟子たちが、一生の内で見ただけ、1 番立派で…、かつ大きな建物が、その「ヘロデの神殿」だったと思われれます。…ですから、この時に、弟子たちが、そういった神殿を見て感動したというのは、何も不思議な話ではありません。

しかし、それを聞いて、イエス様は、こう返されます。2 節、『この大きな建物を見ているのですか。石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。』って…。実は、今もエルサレムへ行きますと、神殿そのものはありませんが、その神殿の城壁であった部分などを見ることができます。そこには、何トン…、何十トンもの大きな石があって、かつてあった神殿の大きさをうかがい知ることができます。

でも、皆さん! どうか、思い出してみてください。あのイエス様は、当時のエルサレムの町を見て、涙を流されたわけで…、それは、当時のエルサレムの町が形骸化と言うか、まるで、葉っぱだけのイチジクの木のようにであったからでした。…そうでしょ! …確かに、そこには、大きく立派な神殿が建っていました。しかし、その神殿の敷地内で商売をしていた者たちは、巡礼にやって来た者たちの足元を見て、暴利を貪っていたわけで…、それは、イエス様の目から見た時、まるで、強盗のようでした…。

また、その神様に仕えていたはずの律法学者や祭司長たちは? と言うと、先週引用したマタイ 23 章にあったように、これまた、上っ面だけの信仰者で…、イエス様から「偽善者!」と呼ばれて…、激しくののりられておりました。「彼ら律法学者たちは、自分たちが天国に入っていないばかりか、入ろうとしている人々をも入らせません!」…ま、そんな風にイエス様から非難されていたわけです。

皆さん、覚えてくださっています? …少し前のメッセージでも引用した申命記のみことばで、天の神様は、イスラエルの前に、「祝福と何を置いた」って、おっしゃられました? …例えば、30 章です。そこには、こうあります、『19 私は、きょう、あなたがたに対して天と地とを、証人に立てる。私は、いのちと死、祝福とろいを、あなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。あなたもあなたの子孫も生き、20 あなたの神、【主】を愛し、御声に聞き従い、主にすがるためだ。確かに主はあなたのいのちであり、あなたは【主】が、あなたの先祖、アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われた地で、長く生きて住む。』(申命記 30:19-20) っって…。

このように、天の神様は、イスラエルに選択を与えられました。もしも、彼らが神様のみこころに従っていなら祝福を…、しかし、神様のみこころに沿わない選択をしていくなら呪いがある! っって…。そうだったでしょ! …だから、イスラエルの…、特に、あのダビデやソロモン以降の時代にあって、イスラエルは苦難に次ぐ苦難、敗北に次ぐ敗北を経験していっわけです…。

悲しいことに、イスラエルが受けなければならなかった、試練の「理由」は、そういったところにあります。彼らのそういった不信仰のゆえに、この後、紀元 70 年に、エルサレムは、ローマによって陥落させられて、その後、おおよそ 1900 年もの間(70-1948 年)、国を失って、流浪の民となっていっわけです。

●現代の私たちが教訓とすべきこと!

3 節に出てくる、オリブ山というのは、エルサレムの神殿のすぐ東にあった山のことで、ここで、イエス様の弟子たちの内、『ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレ』の 4 人が、イエス様のところへ行っって、この後の質問をしたようです。『ひそかに…』というのは、恐らく、「大勢の群衆が居ない時に…」という意味だろうと思われれます。

彼ら 4 人がイエス様に尋ねた質問は、このようなものでした、4 節、『お話しください。いつ、そういうことが起こるのでしょうか。また、それがみな実現するようなときには、どんな前兆があるのでしょうか?』って…。そうして、その質問に答える形で、この後、イエス様が「世の終わり」について教えていっくださるわけです。

現代に生きる私や皆さんが“教訓”とすべきこと…、それは、この当時のイスラエルだけでなく、今日、このメッセージを聞いてくださっている皆さんにも、大きく分けて、2つの選択肢がある！ということです。…それは、まず第1に、この神様を信じて…、この神様のみこころに沿って歩いていこうとするか、それとも、自分のことを第1にして、神様以外の何かに従おうとするかどか？…そのどちらかです。

Ⅱ コリント書 4 章のみことばは、私たちが本当に価値あるものを選び取れるために、こう教えてくれています。『15 すべてのことはあなたがたのためであり、それは、恵みがますます多くの人々に及んで感謝が満ちあふれ、神の栄光が現れるようになるためです。 16 ですから、私たちは勇気を失いません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。 17 今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。 18 私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続きます。』(Ⅱコリント 4:15-18)って…。

このみことばが教えてくれているように、目に見えるものは、必ず、いつか壊れます！たくさんの財産があったとしても、いつかは消えてなくなります。…でも、私たちが信じる神様や救い…、あるいは、真の信仰や希望、愛といったものは、永遠に続いていきます。願わくは、今日、私たちがこの後に学んでいくみことばの中で、ますます、価値ある選択を、皆さんが選び取っていただきますことを期待しています。

I・さらなる「惑わし」！(5-6 節)

さあ、それでは、イエス様が「世の終わり」について、どのように教えてくださったか？今から、具体的に見ていきましょう！まずは、今日のみことばの内、5-6 節です。そこで、イエス様は、「この世の終わりになると、さらなる“惑わし”が起こる！」ということを教えてください。どうぞ、今日のみことばの 5-6 節をご覧ください。そこには、こうあります。

5 そこで、イエスは彼らに話し始められた。「人に惑わされないように気をつけなさい。

6 わたしの名を名のる者が大ぜい現れ、『私こそそれだ』と言って、多くの人を惑わすでしょう。

●イエス様からの「命令」とは？

ここマルコ伝 13 章で、イエス様は、合計4回も、「気をつけなさい！」という命令を与えておられます。私たちは、まず、しっかりと注意 & 警戒をしていかないといけないのです。…と言いますのは、先週の礼拝でも学んだように、私たちの周りには、あまりにも、間違った教えや聖書的ではないことを教える教師たちが多くいます。ここで、イエス様は、それと似たようなことをおっしゃってられます。6 節に、『わたしの名を名のる者が大ぜい現れ、『私こそそれだ』と言って、多くの人を惑わす…』とある通りです。

どうか、皆さん。誤解をしないでください。ここで、イエス様は、世の終わりについて…、「その時には、どのような前兆があるのでしょうか？」という弟子たちの質問に答えるかたちで、「世の終わりに起こる“前兆”」について教えてください。私たちが理解では、所謂、イエス様が空中にまで来てくださる「空中再臨」の前には、それほど明確な、はっきりとした前兆はありません。…と言いますのも、空中再臨は、Ⅰテサロニケ 5 章のみことばが教えてくれているように、『盗人のように来る…』からです。

実は今日、私たちが学んでいる箇所（平行記事は、マタイ伝で言うと、24-25 章になります。いつも言っていますように、あそこのみことばは、空中再臨ではなく…、地上再臨の前兆について教えてください。…）ということは、今日、私たちが学んでいるみことばもまた、空中再臨ではなく…、地上再臨の前兆…、言い換えますと、7年間の患難時代の中で起こることについて、イエス様は教えてください。…その中でも、私たちが今日学んでいる 13 節までのみことばは、その7年間の患難時代の中の…、前半の3年半で起こることについて預言されていると考えられています。

先週の礼拝では、あまりはっきりとは言えませんが、今の…、私たちの周りには、聖書のみことばが教えて“いない”ことを、さも、聖書の教えであるかのように教えているような教会や教師たちが多数存在します。…しかも、悲しいのは、多くのクリスチャンたちがそういった間違った教えに惑わされて…、彼らは、簡単には、その間違いに気づけないという点です。…それもそのはずです。…と言いますのは、ちゃんとした神学校を卒業して、ある程度の神学的な教育を受けたはずの牧師先生たちが、自分たちが聖書的でないような教え…、言わば、間違いを教えている！ということに気づけていないのですから…。

じゃあ、具体的に、彼らは、どういった間違いを教えているのか？…そういった点については、この講壇から、もう何度も語ってきておりますので、今日は時間の関係もあって、あえて、そういったことについて触れないでおきます。

●そこから受けられる、恩恵！

でも、一体、どうして、たくさん間違いがあるというのなら…、天の神様は、そういった間違いを放っておかれているのでしょうか？…それは、私たちの天の父なる神様が、恵みと憐れみに満ちた御方だからです。もしも、神様が、ほんの少しでも、私たちが正しい道から反れたり外れたりしただけで、裁かれるような御方なら、私たち人間は誰も救われることができません。…そうじゃありません？

それと、実は、間違った教えや真理とは違った理解ではあっても、そこから受けられる“恩恵”というものもあるのです。…例えば、皆さんは、「三位一体」という教理をご存知かと思います。しかし、聖書のどこを探しても、「三位一体」などという言葉は出てきません。しかし、聖書の教えを正しく理解したならば、明らかに、聖書が、①父なる神、②子なるイエス・キリスト、そして、③助け主なる聖霊という、唯一ではあっても、3つの異なった人格(≒正しくは位格)を御持ちの神様のことを教えているという理解に達するはずなんです。

でも、実は、初代教会が、今私たちが理解しているような三位一体の考えに行き着くために、それとは少々違った聖書理解などがあって、そういった考えの何がどう間違っているか？ということが精査されて、正しい三位一体論などの理解に行き着いた、というような側面があるという意見もあるのです。

それだけではありません。ここ 6 節のみことばで、イエス様は、『わたしの名を名のる者が大ぜい現れ、『私こそそれだ』と言って、多くの人を惑わす…』とおっしゃってられます。人類の歴史上、一体、何人の者たちが、「私こそがキリストだ！(あるいは)私は救い主だ！預言者だ！」というような人物が出てきたことでしょうか？…悲しいことに、そういった人物については、イエス様の時代のすぐ後にも出てきました。…しかし、そういったような惑わす者が、世の終わりになってくると、ますます、多く出現してくるという話です。

でも、過去に、そういったような、「自分こそがキリストだ！救い主だ！」というような者たちが出てきたからこそ、私たちは、本物のキリストとは、どのような者か？あるいは、キリストの再臨がどのようにやって来るかを、聖書的に追及することができたのです。

こういったことだけではありません。…実は、こういったこと以外の、正しい教理の発見と言うか、正しい聖書解釈に行き着くために、様々な違った考えや間違いが現われてきて、実は、そういった様々な考えや神学が、正しい聖書理解に貢献していった、という側面もあるのです。

だから、私たちは、現代においても、様々な違った教えや間違いなどの教えなども聞いてみて、それらの教えの何がどうおかしいのか？どこがどう聖書的でないのか？ということ学んで、ようやく、正しい聖書理解へ行き着く！ということが必要なのではないでしょうか？…ここで、イエス様が注意 & 警戒するよう教えてください。…それに対抗するための正しい方法は、私たちが聖書を学んで、正しい聖書理解を身に付けていく以外にあるでしょうか！

ま、そういったような必要もあって、私は、この講壇の上から、他の教派の考えや、私が納得のいかに聖書解釈などを紹介させてもらっています。…と言いますのも、そういったような、少々おかしな聖書理解や先人たちの間違いなどを聞いたら、皆さんにも、同じような過ちに陥らないように済むという、そういった側面と言うか、教訓のようなものが必要だと判断するからです。

Ⅱ・全世界的な混乱！(7-8節)

その次に、イエス様が教えてくださったことは、全世界的な“混乱”です。どうぞ、今日のみことばの内、7-8節をご覧ください。そこで、イエス様は、こうおっしゃられました。

7 また、戦争のことや戦争のうわさを聞いても、あわててはいけません。それは必ず起こることです。しかし、終わりが来たのではありません。

8 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、ききんも起こるはずだからです。これらのことは、産みの苦しみの初めです。

① 戦争

ここで、イエス様は、3つの項目を挙げてくださっています。1つは戦争、2つ目に地震、3つ目に飢饉であります。まず、戦争について、『それは必ず起こる！』と教えてくださいました。実は、ここで、『必ず』(δεῖ)と訳されてある言葉は、「必要である、当然である、決定的にそうなっていて変えられない、避けられない…」という意味の言葉が使われています。つまり、私たち人間が、そういったような戦争や紛争に走ってしまうことは、私たち人間が罪という問題を抱えている以上、決して、避けることができない問題なのです。だから、私たち人間は、アダムとエバが罪を犯した…、その瞬間から、お互いに反目し合って…、お互いに相手のことを支配しようとしてきたじゃないですか！

この長い人類の歴史上で、ほんの一瞬でも、戦争や紛争が無かった時代なんてあったのでしょうか？…例えば、つい最近も、私たちは、アフガニスタンで、武装勢力が権力を掌握したなんていうニュースを聞きました。これから、そのアフガニスタンは、どうなっていくのでしょうか？…あるいは、つい半年前には、ミャンマーでも軍事クーデターが起こりました。…いえ、アフガニスタンやミャンマーだけではなく、これから、世界情勢はどうなっていくのでしょうか？

② 地震

その次に、イエス様が教えてくださったのは地震です。ここ日本でも記憶に新しいのは、10年前の、あの東日本大震災です。また、その前の、1995年には、阪神・淡路大震災を経験いたしました。日本だけではなく、中国でも、2008年に四川大地震によって9万人近くの人たちが亡くなっています。もう少し前の2004年には、スマトラ島沖地震が起こって、そのために、22万人もの人たちが亡くなっています。もちろん、これら以外にも、大きな地震はありましたし…、今の時代、ちょっと地震の頻度が多いように思うのは、私だけなのでしょうか？

③ 飢饉

その次は、飢饉です。例えば、現代の…、これほど、ハイテクや流通システムが進んだ社会でも、この地球上の5分の1に当たる、約14億人に十分な食料が行き渡っておらず…、彼らは、1日を100円未満で生活し…、世界中の約5億人が飢えか、栄養不足に苦しんでいる、ということだそうです。私たち日本人からすると信じられないですよね？ここ日本にいると信じられないかも知れませんが、この地球上では現在、人口はどんどん増えていて…、1年間で、約7千万人も増えているのだそうです。そのように、

今後も世界中の人口が増えていって、食料危機の問題は、この後、どうなっていくのでしょうか？

それと、今日のみことばの平行記事であるルカ伝 21 章では、『疫病』についても触れられておりました。ちょうど、私たちは今、新型コロナという、全世界的な疫病との戦いの真っ只中にいるわけです。…ただ、こういったものは、人類の歴史上、ずっと続いていたわけで、恐らく、空中再臨の後には、もっと、こういったような全世界的な混乱が数多く起こっているのだらうと思われれます。

例えば、疫病一つにしても、そういったことは、人類の歴史の中で、何度も起こってきただけです。しかし、今回の新型コロナにしても、爆発的に世界中に広まっていったために、すぐに変異株ができてしまって、その変異株が瞬間に、世界中に拡散していったしまったわけですが、もしも、今回のような新型コロナによる感染症が、100-200年前前に発生していたら、その拡がり方はかなり違っていたのかも知れません。

Ⅲ・クリスチャンへの迫害！(9-13節)

さて、最後に、このみことばから、イエス様が教えてくださったことは、私たちクリスチャンへの“迫害”であります。どうぞ、今日のみことばの内、9-13節をご覧ください。そこには、こう記されてあります。

9 だが、あなたがたは、気をつけていなさい。人々は、あなたがたを議会に引き渡し、また、あなたがたは会堂で打ち打たれ、また、わたしのゆえに、総督や王たちの前に立たされます。それは彼らに対してあかしをするためです。

10 こうして、福音がまずあらゆる民族に宣べ伝えられなければなりません。

11 彼らに捕らえられ、引き渡されたとき、何と言おうかなど案じるには及びません。ただ、そのとき自分に示されることを、話さない。話すのはあなたがたではなく、聖霊です。

12 また兄弟は兄弟を死に渡し、父は子を死に渡し、子は両親に逆らって立ち、彼らを死に至らせます。

13 また、わたしの名のために、あなたがたはみな者に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。

● 神の御計画＝迫害によって、福音が広がる！

ここ 9 節で、イエス様は、2度目の『気をつけていなさい！』という警告を与えてくださっています。実は、ここ 9 節以降、イエス様の預言は、世界的な視野から、私たちクリスチャンを対象としたものへ変わっています。…ちなみに、ここ 9 節で言われているところの『議会』とは、ユダヤ人たちの議会のことであり…、また、『会堂』と言いますのは、ユダヤ人たちが使っていた「会堂」のことであります。…ということは、ここで言われている迫害というのは、ユダヤ人たちから起こって、全世界へ広がっていくということです。

実際、使徒の働き 4 章などを見てみると、イエス様が天へ昇っていかれて、わずか、数ヵ月ほどで、ペテロやヨハネは、当時の議会に呼び出されて、『いっさいイエスの名によって語ったり教えたりしてはならない！』(使徒 4:18)というような注意と言うか、ある種の迫害を受けるわけです。

また、それだけではなく…今日のみことばの 9 節には、『わたしのゆえに、総督や王たちの前に立たされます。』とあります。今度、これは、異邦人たちからの迫害です。実際、あのパウロが、イエス様を信じる信仰のゆえに、総督や王たちの前に引き出されましたでしょ？

でも、その次に何とあります？⇒ 9 節の最後に、こうあります。『それは彼らに対してあかしをするためです。』って…。ペテロとヨハネだけではなくありませんでした。あのパウロやバルナバだって、そうです。彼らは皆、イエス様を信じる信仰のゆえに迫害を受けました。…しかし、そういった迫害があったから、ますます、この“福音”のメッセージが広がっていった！という側面があるわけです。…そうでしょ！

このようにして、天の神様は、迫害というものを通しても、私たちの信仰を明らかにしたり、また、信仰を成長させたり…。あるいは、この信仰をますます拡散させたりして下さったりして、最善なる神様のみことろというものをなしていただくのです。

だから、10 節で、イエス様はおっしゃるわけです。『こうして、福音がまずあらゆる民族に宣べ伝えられなければなりません。』って…。実は、こういったみことばから、イエス様の再臨という出来事が、2000 年前の時代からすると、まだまだ、先の話であることが分かります。…と言いますのは、この当時、例えば、福音のメッセージには、ここ日本までは伝わっていなかったでしょうし、また、アメリカ大陸にも広がっていませんからです。そうでしょ？…しかし、今はどうでしょう？ここで、イエス様がおっしゃっている『福音がまずあらゆる民族に宣べ伝えられなければなりません』ということの具体的な指針が分かりません。だから、ある意味においては、今もう既に、福音があらゆる民族に伝わっている！とも言い得るのです。…しかも、何度も言うように、今日私たちが見ている前兆とは、空中再臨の後の患難時代のものでありますから、そう考えると、いつ、I テサロニケ 4 章で教えられてある、イエス様が空中までやって来て下さって、私たちクリスチャンたちのことを迎えに来て下さるという出来事が起こってもおかしくありません。

●クリスチャンたちに与えられる 助け !

そうして、どうぞ、今日のみことばの 11 節をご覧ください。ここで、イエス様は、そういった迫害の中にあつて、どのように、私たちクリスチャンたちのことを助けて下さるのか？ということについて教えて下さっています。11 節、『彼らに捕らえられ、引き渡されたとき、何と言おうかなどと案じるには及びません。ただ、そのとき自分に示されることを、話さない。話すのはあなたがたではなく、聖霊です。』とあるように、私たちの内に居て下さっている聖霊なる助け主が、私たちクリスチャンたちのことを助けて下さるのです。

でも、皆さん、知ってました？…時々、こういったみことばを使って、私たち説教者がみことばを学ぶという準備をしなくても、聖霊なる神様が語って下さるから、説教者は何も準備をしなくても良いのだ！ということを実際に信じて、それを実践している牧師先生方も、おられるのです。…でも、その説教は、本当に、聖霊が語って下さったものなのか？あるいは、牧師先生が過去に学んだことや、その場限りで語った浅いメッセージなのか？はつきりしません。…でも、少なくとも、ここで、イエス様は、私たち説教者が準備しなくても、聖霊なる神様が語って下さるから、準備をしなくても大丈夫！というようなことを教えたかったのではない！というのは明らかです。

その後、12 節のみことばを見ますと、そういったクリスチャンに対する迫害が、悲しいことに、家族からでも起こり得ることが教えられてあります。『また兄弟は兄弟を死に渡し、父は子を死に渡し、子は両親に逆らつて立ち、彼らを死に至らせます。』というみことばが、そうです。実際、ここ日本にあつても、イエス様を信じるということは、時々、家族を失うことに近い場合だって有り得ます。また、特に、イスラム圏においては、もっと、激しい迫害が数多く起こっていると聞きます。

そうして、最後 13 節に、『また、わたしの名のために、あなたがたはみなに憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。』とありますが、ここで、イエス様は、最後まで、そういった厳しい迫害に耐え抜いた者たちが、その行ないのゆえに救われる！ということをお教えおられるのではありません。

そうではなくて、本当に、イエス様を信じて救われている者たちは、その内に、助け主なる聖霊が住んで下さっているから、そういった厳しい迫害にも耐えられるし、決して、信仰を棄てることのできないのです。…と言いますのは、ヨハネ 10 章で、イエス様が教えて下さったように、1 度、イエス様を信じて救われた者たちのことを、天の神様が決して、離して下さらないからです！…そうでしょ！

<励ましの言葉>

このように、私たちの主なる神様は、いつも、救われた私たちと共に居て下さって、どんな時でも…。どんな迫害からも守って下さいます。今日、私たちは、空中再臨の後に起こる患難時代前半に起こる様々な出来事に関する預言について学んできましたけれども、私たち…。今もう救われているクリスチャンたちが、この患難時代を通ることはありません。…と言いますのは、私たちは、その患難時代が起こる前、イエス様が空中まで迎えに来て下さった瞬間に、『ピリピ 3:21 で教えられてあるような『栄光のからだ』に変えられて、空中でイエス様とお会いできて…。その後は、ずっとイエス様と一緒に居続けることができるからです。

でも、悲しいのは、救われていない方々です。彼らは、福音を知つていようと知つてまいと…。あるいは、教会に通つていようと通つていなかろうと、この患難時代を通つていかななくてはなりません。「自分は救われている！私はクリスチャンだ！」と思つていても、実際には救われていない者たちは皆、この患難時代を通つていくわけです。聖書のみことばは、決して、少なくとも人数の自称クリスチャンたちが、こういった患難時代を通つていくであろうことを、何か所所のみことばを通して、警告してくれています。

果たして、あなたは大丈夫でしょうか？…あなたは、いつ、イエス様が、何の前触れも無く、空中まで、私たちクリスチャンを迎えに来て下さった時、間違いなく、天に上げられる！という確信をお持ちでしょうか？そのための備えができていますでしょうか？

もしも、まだなら…。一刻も早く、このイエス様のことを信じて、天に行くための備えをしていただきたいと思つます。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。